

をせき止めて集材し馬で引き上げる場所……現在の十勝ダム工事事務所の附近です。集材された木材を新得の駅土場まで運ぶため馬鉄がありました。木材を積んだトロッコを馬にひかせて線路上を運搬する方法です。岩松小学校下手、ニコロ川土場から、屈足、佐幌高台を経て新得駅土場に運んだのです。大正8～9年から昭和3年まで行われたが、拓殖鉄道の開通により屈足駅土場出しとなる。

岩松駅通所……岩松奥地の開発事業が盛んになると共に人間の移動も多くなる。道庁は、大正15年、岩野浅次郎に依頼し駅通所を開設する。道産馬一頭、放牧地70町歩附与され、管理人手当月額7～8円であった。建物は、駅通45坪、管理宅28坪を併設していた。トムラウシ方面の開拓要人や一般人が泊る半官半民の簡易宿も兼ね、十勝川上流奥地鉾山の探検者の出入りもあつたりして人々の往来が多くなった。熊ですが、熊にまつわる話はたくさん聞きました。畑のトウキビを食われた、ソバ畑が全滅したとか、林道で熊に食われたなど、又、菅野光民という人が熊におそわれ死んだ噂も聞きました。私は熊とは出会ったことはあつたが熊の方で逃げた。開拓当時は出なかつたが、奥地に人が多く入り、又、不作の年に里に出ては畑を荒すようになった。屈足への移転は、昭和30年駅通から自宅分を切り離し現在地に移転しました。

94年をふりかえってみて……私の生母は長命で、実に健康な人でした。85歳頃までは、26号の森商店で孫達にアメ玉等の土産を買い、2里の道を歩いて岩松の私のところまで来てくれた。兄の金平が没してより3年後102歳で亡くなりました。長命の血統でしょうね。こんなこともありました。入殖して間もない頃、十勝川を丸木舟で渡り、向いの畑に作業のため、義妹と渡辺の奉公人と三人で朝仕事に出かけたとき、舟を操っていた作男が竿を舟の下にとられ川に落ちてしまい男は泳いで川向いに上ったが、舟は私達女2人を乗せどんどん流されるし、もはやこれまでと観念したところ川の中程にあった大きな岩に舟は横付けとなり助かった。恐いおもいをしたね。新婚時代のことで遠い昔の思い出です。川向いの土地も、大正2年の大洪水で流失してしまつた。

お蔭様で健康に恵まれ、子供にもたくさん恵まれ、まじめに働いて、家業も安定し、夫もどうか社会的に地位を得て、私なりに幸せな人生を歩んで来たと思います。90歳を越えた今も、丈夫で楽しい毎日を、子や孫に囲まれ過ごしており、ありがたいことと感謝しております。

佐 藤 宗 寿 さ ん ( 明 治 34 年 生 )

明治41年、私の父は16戸の入植者の団長という事で、古川金次郎さんなどと、故郷福島県を出発し、相馬団体との名称で、福山の地へ入殖したのです。現在の安川一郎さんより若干北寄りになります。私8歳の時です。大きな樹木がたくさんあって恐ろしい感じがしたものです。その年の7月に、トンネル沢「特別教授所」が開設されました。屋根も笹、ぐるりも笹で囲われ、全くの笹づくめの建物でした。文字通り堀立て小屋の学校なのです。中は、いろいろが四角に作られ暖を取るようになっており、机は丸太を手攪きで平にし、面を平にしてはあるが鋸の目もそのまま、椅子は丸太を輪切りで適当な高さの物を人数分を立てるようにおき、それに座って勉強となるわけです。夏には



壁の笹を押し破って草の芽がたくさんニョキ、ニョキと顔を出し、冬になりますといろりに割木を燃やすのですが煙りが目にしみて大変なんです。前ばかり暖かく、背中は寒さが身にしみるのです。又、吹雪になると、四方から、雪が吹き込んでくるし、いろいろの煙りが教室一杯になる。全くもって大変なものでした。それでも、同じ年頃の友達に会える楽しみと、学校に來ている時間は家の仕事を手助けしなくともよいので、毎日元気に通ったものです。

当時の先生は、「清野正一」さんといわれる、17~18歳位の代用教員の人でした。この先生は、後に旭川市に転出され、国鉄職員になったのですが、現在でも文通を致しております。私が身体を痛めて旭川に入院しておりましたとき、老齡にもかかわらず見舞に來られ、感激しました。もう涙の出るのを止めることが出来ませんでした。90歳を越した人です。その時の在住地は鎌倉なのです。鎌倉から來られたのですから、教育とは、このようなことをいうのかも知れないなどと考える始末でした。

根室本線開通は明治41年9月ですから、翌年の春かもう少し後でしたでしょうか、機関車から飛び散る火の粉のため、沿線火災が発生して、三日三晩燃え続けやっとの思いで鎮火したのですが、そのもらい火で、折角の笹葺きの特別教授所は全焼となり、残念やら、寂しい思いをしたものです。その後部落の空家になったのを解体し、校下の人々全員の奉仕により、小学校を建てられたのは、秋もおそくなってからでした。

開拓の作業は大変なものです。親達が文字通り必死に、家業に精を出して働いている姿には現在思い出しても、頭の下がるような毎日でした。朝は朝星、夜は夜星を見ながら働いているのですから。

開墾というのは、まず、一抱えも二抱えもある大木を倒すことから始まり、製材所など無い時代ですから、本当に必要な量だけ残し、残った量全部を集めて、夏中乾燥し秋か春早く2日も3日もかけて焼いてしまうのです。この煙が春の空に高く高く昇るのを見ますと、ああ厳しい冬から解放され、やっと春が來たんだなあとおもったものです。今思うと実に立派な、檜、楓、アサダ、桂、などで本当に惜しい心地がします。

そんな厳しい生活の中でも、結構楽しいこともありましたね。私の家の前をほんのひとまたぎする程の小川の流れがあるのです。この小川に魚が不思議な位たくさん上ってくるのです。岩魚、山女、ウグイ、赤腹、時には鱒も上がるのです。ですから、まったくおもしろいほどよく釣れるのです。10cm~30cm程の山女、岩魚、ウグイなどが、1時間も釣っていると5升バケツに一杯になるのです。これが又、農繁期の忙しい折の貴重な蛋白源になるのです。それにしてもよくもあのようにたくさん釣れたものだといまでも懐しく思い出されます。これが子供の仕事の一面でもあったようです。

トンネル沢の名称ですが、これは、狩勝線西口事業場として、多くの土工夫が入り、昼夜を問わず工事は進められておりましたので、その足元の沢伝いということで、いつとはなしに、「トンネル沢」と呼ばれるようになったものようです。農閑期には、福山はもちろん、しんとくの人々が現金収入を得るため働きに行ったとのことでした。